

ようきゆう
陽暉楼

宮尾登美子



中公文庫



中公文庫

よう き ろう
陽暉楼

定価はカバーに表示してあります。

1979年9月10日初版

1997年6月30日43版

著 者 みや お と み こ
宮尾登美子

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部)

03-3563-3664(編集部)

©1979 CHUOKORON-SHA, INC. / Tomiko Miyao

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-200666-X C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

陽 暉 樓

宮尾登美子 著

中央公論社

陽
暉
樓

雨の日のお座敷に、余興の長いものなど舞っていて三味線が本調子から二上りに変るとき、二上りからまた三下りに戻るとき、これに似た湿った音をときどき微かな耳に捉える事がある、と房子は現つに思った。

いい三味線の糸巻には象牙を使ったものが多いが、地方の姐さん方のなかには、飾りよりも音締めの上さを採って黒檀などつけている人もあり、糸の上げ下げのわずかな斗りのその木の触れ合いを、房子は何時の間にか耳の底に残していたものと見える。三味線の調子変りは普通、衣裳や小道具の改まる振りになつてゐるから、長いあいだ立方ばかり勤めてゐる房子にはうつかり聞き過せぬ音ではあつた。

その音に重なつて、房子の手足が今ひとりになつてゐるのは、去年の温習会のとりに舞つた清元の「保名」で、長い置き浄瑠璃のあと、素襖袴を引いて花道の七三に走り出たときのものの狂いの振りが思うようにつかないのを、しきりと歯痒がつてゐるのであつた。劇中、恋人の櫛の

前の死を嘆く余り、筐かたみの小袖を抱いて春の野を狂い歩く保名の手が花道で一度、本舞台で一度、その小袖を取落す個処こころがあり、稽古けいこのときお師匠ししや人も、

「そこ、もっと呆ほうけて、呆ほうけて、」

と房子にはいつに似合わずくどく注文をつけただけに、やはり気懸りは未だに残る。お師匠んの型を習い丹念な練習を積み重ねて、本日の保名の出来は人々の絶讃を浴びたが、房子の胸には終ったあともなお暫く淋しさが立った。

あるとき保名の型は出来ていたかも知れないが、ひとり省みて、しんから恋のもの狂いになり切れなかった残念は、日頃廻りの人から思慮深さを褒められ、口の堅さを信頼されている房子の氣質への深い関わりとなつて思われて来る。浅い夢の中で、私じゃとて女子じゃもの、乱れぬ事が何のあろうかと反撥はんはくしている自分があり、地の節ふしの、へ姿もいつか乱れ髪、の虚うつけた様を、ここで身も心も思い切つて放つ、思い切つて放つ、と軀を励ましていたのであった。花道に飛び交っている差し金がねの蝶に視線を移そうとしている房子に、その白い蝶はさきほどから聞えている湿った木の音と共に次第に近付いて来て大きくなり、同時に衿元に曉方の冷えが忍び寄つて来て、房子は、

「ああ、」

と大きい息をして、次第に醒さめ、あれは三味線の糸巻を締める音では無うて、櫓舟の櫓の音、と思つた。

朝の遅い芸妓稼業げいしやでは早立ちの櫓の音を聞く事は滅多とないが、それでも長年大川端に住みついていれば、潮の匂いとともになまざまな水音の、取り分け動力船蒸気船の舟立ちの賑わいは何

となく知ってはいる。静まり返った水の上にたった一挺櫓の小舟の音しか聞えて来ぬのを、

「今朝はまた、何と淋しいこと、」

何でやろ、何でやろ、と胸に呟つぶやいているうちはまだ芯まで醒め切ってはおらず、障子の明るさを避けて寝返りを打とうとする拍子に、片髪がすつと何かを刷いたのを手さぐりで引寄せてみて、今度は全身はつきりと醒めた。

指先で拾ったのは初夢の禁厭まじない紙で、ゆうべ寝しな、高枕の紐を解いて上の小枕を外し、箱の落しにこれを入れたあと、

「ええ夢見さしてつかさいませ」

を三遍唱えて枕を叩いたのに、どう間違つて枕の外にこぼれたものであろうか。

去年の暮、と云つてもそのときの埋火が火鉢に生き継いでいる、まだ二日前の事でしかないが、芸妓部屋の外に立っていつも顔馴染の僇せむしの辻占つじうら売りが声を掛けて来たとき、朋輩たちは群がり寄つて格子のあいだから一銭銅貨を差出して、皆これを買った。半紙の四分しふいち一大の真草紙まぐさかみには木版で「一ふじ二たか三なすび」と刷つてあり、文字の脇には大小不揃いの富士山と鷹と茄子の絵の描いてあるのを若い妓たちにはためつすがめつし乍ら、

「なにこれ？ 焙あぶり出しでも水絵紙でもないのに、一銭とはまた高いやないか、」

と賑にぎやかに云っている傍で房子は五銭の穴明きを弾み、

「おつりはええよ。あんた何ぞ好きなものでもお買いや、」

と縁起をつけてやったのも、実はよく当ると云うこの辻占売りを暮うちからずっと待ち兼ねていて、元日の晩、是非にも見たい夢を首尾よく当てて貰いたい願いのある為ではあった。

夢は真夜中が逆夢、曉方が正夢と云うなら、ついさっきまで見ていた保名の花道の抜き稽古は、今年もまた、陽暉楼全芸妓の先頭に立って踊り抜かねばならぬ房子の運勢を、暗に指し示したものでとも云うのだろうか。お願を込めたのは踊の精進などではなかった筈なのに、夢神さまの御加護が貰えなかったのは正月もまだ二日の朝、櫓舟を漕ぎ出すどこぞの変り者のせい、と房子にはかえすがえすもくち惜しく思える。それにしても、枕に敷いて寝てこそ効き目も驗たかだと云う禁厭い紙が、外にこぼれていた事からして不吉な兆しだと思ふと胸騒ぎが収まらず、そのうちふっと、あれは自分のではなく、いつも一つ閨で一緒に寝ているそそっかしい妹芸妓のとんぼの分ではないかと気付き、そろりと起上って自分の枕の括りを解いてはみたが、やっぱり落しの中は空であつた。

起き抜けの蒲団の穴を叩きつけ、寝衣に袷纏を引掛けた儘、立てた右膝に顔を載せて房子は暫くとんぼの枕許に座っていた。

一閨に二人ずつ六畳に三閨ひき、二階三室に計十八人の抱え妓たちがこの子方屋「浜むら」に常時起き臥してはいるが、明けて二十二の房子あたりが年長のうちに入っているほど、皆眠いざかりの妓たちなのだから、しらじら明けの時刻まだ誰も目を覚めている気配はない。まるで藁に姉様人形を差したように、結い立ての正月髪を並べて端から端へ身じろぎもせず眠っている朋輩たちの一人一人を眺めていると、皆それぞれに初夢に祈りを籠めたではあろうけれど、自分ほどこの正月を胸膨ませて迎えたものはこの中にあるまい、と房子には沁々思われて来る。

人に話せばたかが初夢、と笑われるかも知れないが、昭和十年と云う今年は房子に取っては大きな運勢の曲り角になる。十二の年から足掛け十年、界限随一と云われるこの厳しい浜むらで辛

抱し抜き、お礼奉公の今年いっぱいを勤めれば次の春は晴れて自由の身となる事が出来る。年妓に取って年季明けがどれだけ待ち遠しいか、住込み奉公の経験を持たぬ人達には到底判って貰えぬほど深いものだけに、日頃そう取立てて縁起担ぎでもない房子にして少し氣を立て過ぎるほどの思いにもなる。実を云えば房子の「ええ夢」とは今年に限って芸の精進ではなく、まして富士鷹茄子にもあらず、去年の暮、やっと長の思いが叶って契りの出来たひとに、夢のうちでいい先ず年頭に逢わして欲しいと云うひそかな願いが籠められていて、それは房子の先ゆきの運勢の占いでもあっただけに、見事外れた氣落ちの深さは正月早々と云うのに淋しい夕ごこちなのであった。

その流連の暮の一日、氣晴しに房子と連れ立って食事に出た晩、そのひとが記念にと買ってくれた大きな羽子板はまだパラピン紙を被せた儘、枕許の簞笥の上に飾ってある。新開地の夜店の裸電燈のもと、姫様顔の押絵がずらり居並ぶ中に一きわ艶めいて紫の病鉢巻の保名があり、うれしいことに、露芝の小袖も浅黄の下着もあの日の房子の装束と全く同じものであった。黒天鵲絨を巻いてある柄に手を掛けて胸に抱くとずっしりと重く、羽子板売りの手締めに送られて店を出るときは晴れがましき、嬉しさ、あるとき房子は思わず涙ぐみ、目の前のネオンサインが暫くは呆やけていた事をあのひとは察していたろうか。羽子板の保名は房子とは逆の、ふっくらした豊頬で目もとに仄かな紅を浮かせているけれど、それをじっと見上げていると、初夢のせいもあって房子は何故か、幸せに張り充ちた思いを持たぬこれまでの日々と同じように、そのひととの仲間も先細りに消えてゆくような不吉さが感じられて来る。

房子が勤めをしている陽暉楼本店ではきのうの元日、恒例の初の出花で抱えの妓を全部、注文

のあつた馴染客の家に割り振って出向かせた。

陽暉楼では海岸通りのこの本店の他に、播磨屋橋に「中店」、高知公園内に「花壇」を持っている上に、下の新地遊廓に金波楼第一、第二、と二つの貸座敷業も経営してはいるが、建物の規模、品格、それに伴う抱えの芸妓数からして本店がすべての頂点に立っていて、内輪ばかりでなく世間にも「本店」とだけの呼名で通用する威勢があつた。この頃高知の町に検番制度はまだ出来ておらず、従つて料理屋が茶屋の役目も果せば待合も兼ね、他家とは交流のない自家専門の芸妓も抱えていれば、それに関わるさまざまな職業の人間もすっかり傘下に収めていたから、この海岸通り一帯は殆ど本店の息の掛かつた者が寄り集まつていたのであつた。

高知市を東西に貫く電車の幹線を「新地入口」で乗換えると、電車は埋立地のなかの新道を南に向つてゆっくり走り、その最初の停留所が終点となつていて、本店関係の家並は停留所脇の下駄屋から東の青柳橋近くまで拡がっている。終点はまた桂浜通いの巡航船乗場でもあり、ここがまだ掘割の大川なのかそれとももう、浦戸湾の一部なのかは論議の分れるところだが、それを暖昧にしているのは、すぐ目の前の中之島を隔てたむこうの水は鏡川であり乍ら、風情よく蛇籠を被せた中之島の先端は浦戸湾十景の一つに入っている事にある。もっとも、海に筆の穂先を寝かせたような中之島の切れる個処まではたとえ潮水ではあつても大川と呼ばねばならぬ、と頑固に云い張る界限の年寄などもない、房子たちも昔から浜むらは大川の岸、と云う風に云い慣らわしてはいる。同じように、大川分の水にのぞんだ本店直結の子方屋には浜むらの他に、一越、扇屋、楠、新崎、松井など孰れも抱え二十人前後の大きい家が本店の本館表玄関を囲んで左右に居流れ、どの家にも云い合わせたように出入口の片方にがっしりした狐格子が嵌め込んであつた。格子は、

女郎屋の張り店から来たものとか、抱えの妓の逃亡をひそかに見張るためとかの云い伝えはあるが、今では素人家との作りの違いの第一の目安になっていて、らくがきや土埃などの気楽な汚れのあとも見えず、どの家も競ってささらが立つほど磨いてある。

この世界はとくに四季の移り変りに敏いから、恵比須講のお札、節分の柂ひいらぎ、春秋の大掃除の施行済のアルミ札、盂蘭盆うらばんの飾り、暮の門松など、いつもむしろ、本店の玄関よりも早くこの子方屋の軒に張り出される。二月の声を聞くなり居並ぶ狐格子の一軒残らず、早くから青々とした柂などの差されてあるのに較べ、どうしても万事一足ずつ遅れてしまうのはこの子方屋と子方屋のあいだにあるハイヤーや舟宿、人力車など足の用を務める商売で、そこが筋金入りの玄人商売と素人でも出来る商売との違いでもあった。表通りから裏通りまではもと湿田と聞く地盤のせいか緩やかな坂になっていて、坂の尽きたところ、地上は裏通り地下は隧道とんねるで連絡している本店別館の庭園と建物があり、その別館の塀を境にしてそちらは全く貸座敷専門の下しもの新地遊廓が、本店とは背を向け合うようにして田圃のなかに一角を領している。

昔、房子が浜むらに來た頃、終点脇の下駄屋から下駄を取って本店端の芸妓部屋に届けるよう使いに出され、途中海岸沿いに電信柱をひとつひとつ数え乍ら歩いてみたら、それは恰度十本あった。電柱と電柱の間隔がどれほどのものか房子には判らないが、子供の足の草臥くたひれを宥なだめるに程よい間合いだとしても十本は遙かな長さとなる。この間には表通りから裏通りにかけて、大きな子方屋のあいだを埋めるようにして表一階裏二階の家や、本店の高い廂に遮られて陽の射さない家や、まんじ巴に入り組んだ路次や棟割の三軒長屋、八軒長屋十軒長屋など、藪こそないものの房子にはまるでお化け屋敷の迷路に似た薄気味悪さとややこしさが感じられた。

地理をよく呑み込まないうちこの迷路に思わず入り込んで了った一日、いくら曲つても曲つてももとの場所に戻った困りようを、房子はいまもときどき思い返す。あのととき、家々の門口に貼つてある火の用心や水難除け、お不動様石鎚様お伊勢様などの護符を目印にしてやつと抜け出せたが、それにしてもこの家の中に住むたくさんの人達は何をしているのだろうか、と云う不審は、まもなく房子が客の座敷に出るようになってから一度に解けた。本店には二百二十幾人の芸妓、五十人に余る仲居、仲居見習のおちよぼの他に、帳場板場から追廻し庭番の端に至る職員、それに出入りの用心棒めいた人達まで、夥しい人のかげが毎日灯ともし前になると、電信柱十本のあいだに拡がるあちこちの路次から湧き出るように現れては、陽暉楼の建物の中に吸込まれてゆく。むろん本店内に住みついてゐる人もあるが、通いは皆午前一時半の山入れが過ぎるとまた逆に、迷路のなかへと順に消えてゆくのであった。

仔細に見れば、長屋のどの家も綺麗に掃除がゆき届き、廂のあいだから洩れるわずかな陽の光を追つて、朝顔やら小菊やらの鉢物を通路の上にまめに移動させていたりする。この地域に三百人に余る本店関係者が暮していれば当然その用達をする店屋もなくはならず、別館に続く裏通りから電車道に跨^{また}がって、散髪屋もあれば髪結もあり、風呂屋もあれば雜貨屋もあるなかで、一きわ人気のあるのはどうしても食べもの屋と云う事になり、うどん屋おかず屋すし屋支那そば屋菓子屋のうちでも焼芋から太鼓饅^{たいこまん}、茹でたバイ、蟹、氷、心太^{こころぞん}まで何でも間に合わせる荒木の店は、特に若い妓たちに取って親里へ帰ったようなつかしい場所となる。誰が取り決めた訳でもないのに、裏の遊廓の娼妓たちはこの周辺の店へは寄りつかず、専ら電車道の西側ばかり利用している有様から考えても、この一角は陽暉楼の創始者山岡一家を中心に据えた一つの家族のよう

な集まりでもあった。地域内の店屋はすべて本店関係者の日常に合わせて雨戸の開け閉てもすれば、便宜もはかり、芸妓たちもまた芸の稽古と寝起きはそれぞれの子方屋でしていても、三度の食事も出の持えも全部本店内でやっていたから、ここでは外も内も、本店現在の統率者二代目山岡源八をみな頼り切って「お父さん」と呼び、芸妓たちは自分の子方屋の親方を「ととさん」「かさん」と別の響きで呼び分けている。

この頃、高知の町で芸妓の抱え百人を超す料理屋は本店中店の他に堺町に松花楼があり、それぞれ店の特色を誇ってはいたが、検番がないだけに一つの料理屋に上ってよその妓を呼ぶ真似は固く出来ず、それは同じ陽暉楼の本店中店うちのやりとりさえ許されなかったから、客の側からすれば不便と云えば不便ではあった。城山しろやまの中に聳える高知城の高い天守閣に登ると、後には巨大な四国山脈に立ちはだかれ、前には天候によって優しくも恐しくもなる太平洋に押寄せられている人口十五万の高知市が、まるで掌の凹みにも乗りそうな心細さで見下す事が出来る。よく晴れた日、この小さな町で瓦を銀色に光らせて目立つのは県庁市役所などの他に、先ず浦戸湾沿いの本店建物、次いで中店、松花楼だったから、昭和初年の不景氣を乗越すにはそれなりの経営の工夫は大いに必要であった。

県外では疾うに始めている検番制度が高知になかなか出来なかったのは、人口に比して大きな料理屋の多いこの町の経営者を守る為、とは一概に云えなからうが、長いあいだそれぞれが「井戸の鮒」でいて殻の外へ出ようとしなないのはそれなりに功も罪もある。三者の交流はなくても、いつ誰が云い初めたか、この三つの店の妓を並べてみれば黙っていてもびたり見分けがつく、と云う噂は、建物ばかりでなく芸妓の立居振舞からして違いのある事が判る。いまは中店に隠居と

して引籠っている初代の跡を継いで、二代目が殊に厳しく抱えの妓たちに芸の精進と行儀作法を云うのも、本店の客筋がとくに良い事にもあった。

昔から一見の客を上げないしきたりを不況時代でさえ崩さなかったのは、二代目が趣好を凝らして初代以来の客を離さなかった故、と云う説の裏には、一時期二代目が市会議員なども勤めて、土佐の観光に一つの蔭の力を持っていたと云う理由もある。客は県内ばかりでなく上方筋も多かったから、浦戸湾の景を本店の庭に見立てたひろやかな保養気分の宣伝は確かに効き目はあった。ご一新以来、廃れていた帆傘舟や投網の廻し打を復活させて浦戸湾十景を制定し、阪神通いの土佐商船や屋形舟の舟宿と組んで、船内潮湯つきの一等船室で高知岸壁に着いた客を、本店芸妓を乗せた屋形舟が舳先を揃えて待ち受ける。まだ土讃線も通っていない時代、離れ小島めいた土佐の地に豊醇な地酒、とれとれ魚の新しい料理、上等の芸妓たちの歓待と云う饗応を受ければ、客はふと浮世離れた思いも湧き、これが陽暉楼の商いと知りつつもつい翫客の一人となつて了う。

こう云う長い年月のあいだには、芸妓ばかりでなく本店職員皆、県外客を扱うコツもすっかり呑み込み、今では高知を訪れる貴官高官の接待はすべて県、市から引渡されて本店が受持つようになつており、少々不景氣風が吹こうと吹くまいと今更屋台骨を案じる必要もなくなっている。

陽暉楼では例年、元日の朝は皆一年で一番早い朝起きとなり、遅くとも八時頃までには芸妓全員お燗始を受けて終る慣わしとなっている。本店の馴染客のうち、仕事柄付合ひの広い客の自宅では、正月礼の接待に本店芸妓に酌を頼むのもこれも古くからのしきたりで、約束の時刻の指定も朝の九時、十時頃からと云うのが多い。この時刻から深夜まで、芸妓たちは一軒の家に釘付け

になる訳ではなく、新年の挨拶も兼ねて幾カ所となく入れ違い、廻り廻って、元日いっぱい勤める事になる。無論線香代とも花代とも云われる揚料はついて上にある上、何処の家でも円札でふんわりと張った祝儀袋は必ず袂に入れてくれたから、まだ旦那を持たぬ半玉や舞妓に取っては、外出の出来る珍しさも手伝ってこの日はいちばん嬉しい日であった。殊に、房子たちお座付芸妓は幾組にも分れて本店お抱えのフォードに乗り、一カ所で御祝儀を二、三曲ずつ舞っては殆どの客の家をいつも訪問しており、従って纏頭袋の数も収入も人よりはずっと多くなる。

此の頃、目立って舞えるようになったとんぼなど大晦日からもう躁ぎ切っていて、勝手に出歩いてはいかんと云うかかさんの目を掠めて裏通りの雑品屋で擬宝珠の貯金箱を買って来たのを、浜むらに一緒に住込んでゐる実の姉の茶良助が見て、

「阿呆やね、あんた。元日の纏頭にじゃら銭貰う気？」

と一発見舞われ、負けん気のとんぼは、

「要らんお世話や。うち簪の足で円札を押込みます、と、」

と云返すと、切返して茶良助が、

「あんたの持ってる簪が擬宝珠の口へ入るかどうか、試してからもの云いなはれ。全部セルロイドばかりやのに、」

と如何にも憎そうな口でとんぼに止どめを刺したのを、そのとき傍にいた房子は、話を妙なところへ飛ばしたのは茶良助がいつも根に持っていると思える自分への当て付けではないか、と受取った。

売れっ妓の茶良助は金廻りも良く、自前の衣裳持物も本店一と云われるほど多いが、それを他